

2002年(平成14年)8月4日(日曜日)

三重県阿山町のルポ刊行

元気な農業ビジネス

町おこしの一つの回答

三重県阿山町(あやまちょう)。人口約八千五百人の町で若い人たちが働いて、五十万人のお客を集め、売り上げは二十五億円。その中心になったのが養豚家を中心にした農事組合法人「伊賀の里モクモク手づくりファーム」だ。

この元気な農村ビジネスの様子をレポートした「伊賀の里 新農業ビジネスただいま大奮闘」(金丸弘美著、発行・NAP、一、五〇〇円)が刊行された。

輸入豚に押される国産豚をなん



「伊賀の里 新農業ビジネスただいま大奮闘」の表紙

とかしたいと、農家自ら肉を販売。やがて手作りのハム、ソーセージを売る。小麦からビールを造り、パンを焼く。そしてレストラン経営にまで手を広げ、町に多くの人を呼ぶようになった。

お客を集めるきっかけになったのは、消費者から提案されたソーセージ教室だった。これが作り手、食材、そして消費者との顔の見える関係を生み出し、大きな農業ビジネスへと発展していく。これまで生産者は作るだけ、メーカーが加工し売る、という一方通行の食のあり方を変え、町そのものさえ変えてしまう。この変化の様子が生き生きとした筆遣いで紹介されている。

若者が定着しない、特産品がない、観光資源がない、人が集まらない、と嘆くばかりの市町村が多い中で、一つの町おこしの回答がここにある、と著者の金丸。

また、BSE(牛海綿状脳症、狂牛病)大手食品メーカーなどの偽装事件が続出し真の食の安全が求められているが、本書は今の食品業界への痛快な「回答」でもあると言えそうだ。